

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第 76 回

源氏物語の植物たち (2)



もとよし ふさお
本吉 總男

2024 年 10 月

光源氏はますます美しく成長し、何事につけても誰よりも優れた才能を見せます。それとともに、帝の寵愛する藤壺女御への愛情は深まりゆくばかりです。しかし、他の女性への浮気心も止まることはありません。

ヤマザクラ

「夕顔」に続く「若紫」の巻では、再び源氏物語の本筋に入ります。源氏はわらわ病（毎日一定時間に発熱する病）を患い、祈禱を受けるため、北山に住む聖（大徳）を訪ねます。祈禱に加えて、山里での生活が源氏には好ましく、病が回復していきます。この季節には京の花盛りは過ぎていましたが、北山の桜は見頃です。ある屋敷に僧都が住んでおり、源氏と交流することになります。源氏と僧都との間に、ヤマザクラを詠む歌が交わされます。

源氏「宮人に 行きて語らむ 山ざくら 風よりさきに 来ても見るべし」
（都に帰って宮人に語りましょう。風が山桜の花を吹き散らす前に見に来られよと）

僧都「優曇華の 花待ち得たる 心地して 深山櫻に 目こそうつらね」
（うるわしいあなたにお会いし、待ち望んでいた優曇華の花に出会ったような気がして、深山桜には目がうつりません）

注：仏教でいう「優曇華」とは、三千年に一度花を咲かせるという伝説の植物で、その花が咲くとき、平和な世界をつくる理想的帝王、転輪聖王が現れるという。

山地に咲くサクラは一般にヤマザクラやミヤマザクラと呼ばれますが、これらの歌に詠み込まれているサクラはやはり普通に見られ、白色または淡紅色の花が美しいヤマザクラだろうと推察します。深山に咲くミヤマザクラという白花のサクラもありますが、美しさではヤマザクラより劣る気がします。

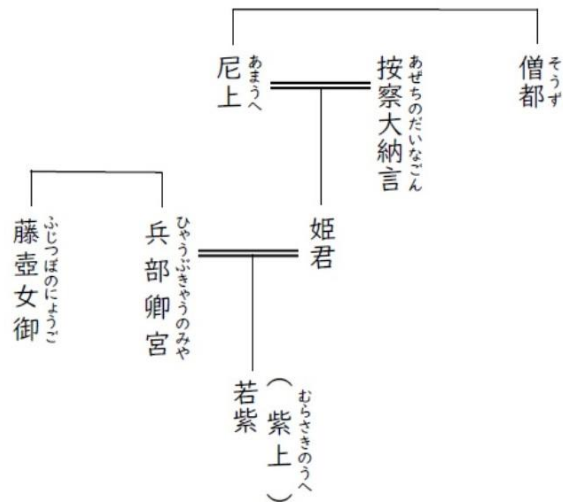


ヤマザクラ 4月上旬 みずぎ野さくらの杜公園

僧都そうずにはあまうへ尼上と呼ばれる妹がいます。尼上はあまうへ按察大納言あぜちのだいなごんという人との間に娘(姫君)がおります。その姫君とひやうぶぎやうのみや兵部卿宮との間に生まれたのがむらさきのうへ若紫(のちの紫上)です。したがってあまうへ尼上はあまうへ若紫の祖母に当たります。若紫は尼上によって育てられています。源氏はこの美しい少女、若紫を目にします。源氏は18歳、若紫は10歳ほど。源氏の最愛の人は、帝が寵愛するふじつぽのしようご藤壺女御です。若紫はまだ子供ですが、容貌がふじつぽ藤壺に生写しののように似ていることから、源氏は自分のそばにおくことを熱望します。

物語は一転し、ふじつぽのしようご藤壺女御には悩み事があって里(三条宮)に引きこもっています。源氏は迷いつつも、いつときふじつぽ藤壺を訪ねます。やがてふじつぽ藤壺は妊娠していることに気づきます。実は、2人の密会はこれが初めてではないようです。秋山虔『源氏物語』(岩波新書)によれば、最初の密会は今は失われた「原源氏物語」に語られていたという仮説があるそうです。

若紫の話に戻りますが、紆余曲折あって、あまうへ尼上が亡くなる前に、源氏はかなり強引に若紫を養育する許可を得ます。若紫の父、ひやうぶぎやうのみや兵部卿宮とふじつぽのしようご藤壺女御は兄妹なので、ふじつぽのしようご若紫はふじつぽのしようご藤壺女御の姪にあたります。



系統図説明: 若紫(紫上)と尼上、藤壺女御との関係

ベニバナ

「若紫」に続く「末摘花」では、突然死んでしまった「夕顔」が忘れられない源氏(18~19歳)は、ひたちのみや故常陸宮がとても可愛がっていた姫君が古びたひたちのみや広い常陸宮邸に住んでいることをたいふ大輔の命婦というものから聞きます。源氏は身寄りのない姫君に是非会ってみたいと屋敷に忍んで行きます。姫君は恥ずかしくてずっと隠れていましたが、お付きの老女房に源氏に会うように勧められ、源氏の近くにいざり出ます。源氏は姫君の容貌をみてびっくりします。姫君の額は青白く、鼻が異様に長く、鼻の先端が赤いのです。源氏は戸惑いましたが、姫君の心根

は優しいことがわかり、これは、^{ひたちのみや}故常陸宮が姫君の行く末を案じて、源氏に会わせたのではないかとも考え、自分以外にこの人の後ろ盾になる人はいないだろうと決心します。

姫君は「^{すえつむはな}末摘花」と呼ばれますが、これは正月に着てほしいと姫君から源氏に送られた衣装が時代遅れの古めかしい裏表紅色のものだったので、源氏は誰に見せるともなく、姫君からきた下手な歌の隅に次のようにしたためます。

源氏「なつかしき 色ともなしに 何にこの ^{すえつむはな}末摘花を 袖にふれけん」
(^{すえつむはな}好ましい色でもないのに何でまたこの末摘花の袖に触れてしまったのだろう。)

この歌からこの姫君を「^{すえつむはな}末摘花」と呼称します。

^{すえつむはな}末摘花とはベニバナ(紅花)のこと。ベニバナの原産地は知られておらず、中央アジア、インドで古くから栽培されていたようです。この植物はシルクロードを通過して中国に入り、日本へは飛鳥時代かそれ以前に朝鮮半島から入ったと考えられているようです(週刊朝日百科「世界の植物」1号)。ベニバナはキク科アザミ亜科の一年草で、茎の高さは1メートル前後。茎の先に^{とうか}頭花をつけます。茎の先端についた^{とうか}頭花を摘むので、^{すえつむはな}末摘花とも呼ばれます。^{とうか}頭花は最初は黄色ですが、その後紅色に変わり、紅色の染料として、また種子は油(灯油、食用油)の原料になります。ベニバナはみずき野や周辺ではみたことがありませんが、鑑賞用にも栽培されているようです。また英語名、サフラワー(safflower)という英語名でも流通し、染料や食用油に利用されています。国内での栽培のほか輸入もされているようです。

ベニバナについては[神戸薬科大学薬用植物園の「植物図鑑 Summer: ベニバナ」](#)が参考になります。

モミジ

^{すえつむはな}「末摘花」に続く^{もみちのが}「紅葉賀」は、源氏18歳の秋から19歳の秋までの出来事が述べられています。^{もみちのが}紅葉賀の催しは、帝の別邸「^{すざくいん}朱雀院」で行われる予定ですが、帝の妃、^{ふじつぼのようご}藤壺女御が身重で参加することができないので、帝は^{しかく}試楽(当日の催し以前に、試みに催される舞楽)を^{ふじつぼのようご}催し、^{せいはいは}藤壺女御にご覧にいます。源氏は^{とうのちゅうじょう}青海波(唐楽の演目のひとつで、2人で舞う)を頭中將と舞います。

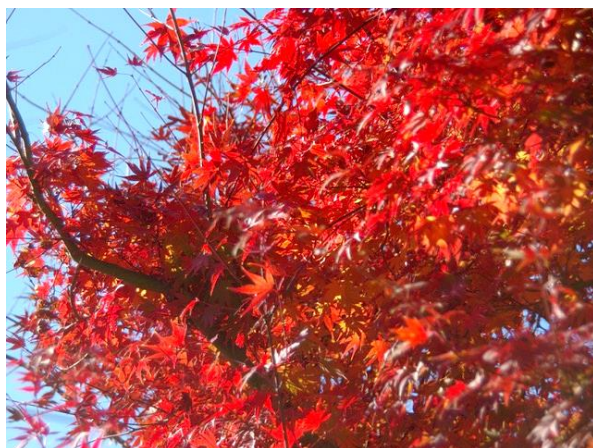
朱雀院への帝の行幸には、春宮(皇太子)をはじめ、親王たち、大勢の貴人が参列します。紅葉の散る中、源氏はここでも青海波を見事に舞います。源氏がかざしに使った紅葉の枝からも葉が散ってしまったので、左大將が菊を折って紅葉と差し替えて差し上げます。

広辞苑には、紅葉とは「秋に、木の葉が赤や黄色に色づくこと。また、その葉」とあるので、紅葉賀の紅葉が現在私たちが通常鑑賞するイロハモミジやヤマモミジのような特定の樹種ではなく、秋に色づいた葉一般をさしているのかどうかは不明です。でもやはり、私は、私たちが今鑑賞しているモミジを平安の人々も鑑賞の対象にしていたと思いたいものです。

イロハモミジは東アジアにも分布しているようですが、関東から西日本に多い樹種です。また、庭園や公園に観賞用としてよく植えられています。ヤマモミジは分布が限られていますが、日本特産で、よく栽培されるモミジです。



イロハモミジ 11月中旬
みずき野さくらの杜公園



ヤマモミジ 12月上旬 わが家の庭

キク

キクに関しては、[第74回「キク科の植物の花\(5\)キク科キク亜科の植物④」](#)に詳述したので、参照してください。なお、源氏がかざしに使った菊は色とりどりの大きなキクと思います。

古くから愛でられた古典的なキクについては[ルアンマガジン「9月9日「重陽の節句」は、菊の花と秋の収穫・健康長寿のお祝い」](#)を参照してください。

なお、中型のキクの切り花（市販品）の写真も載せておきます。

なお、^{もみぢのが}「紅葉賀」の後半には、^{ふじつぼ}藤壺に^{れいぜいてい}若宮（のちの冷泉帝）が誕生し、容貌は光源氏とそっくりです。明らかに源氏の密通によって生まれた子なのですが、帝は自分と^{ふじつぼ}藤壺が関係して生まれた子と疑いを持ちません。^{ふじつぼ}藤壺は苦悩します。^{ふじつぼ}藤壺は若宮の誕生により、^{ちゆうぐう}中宮（正妻）となり、源氏は宰相（国政に参加できる身分）に昇進します。



キクの切り花（市販品） 9月中旬

サクラ

^{もみぢのが}「紅葉賀」に続く^{はなのえん}「花宴」の巻では、源氏20歳のときに^{なでん}南殿で行われた華やかな^{はなのえん}「花宴」の催しが述べられています。^{なでん}南殿とは^{ししんでん}紫宸殿の別名で、^{だいら}平安京内裏（今の皇居にあたる）の中にある^{せいでん}正殿です。

^{なでん}花は南殿に植えられているサクラです。どのようなサクラでしょうか。平安時代を含む古くからのサクラの歴史については、[「日本の桜 02 日本の桜の歴史」](#)（農林水産省 [aff 2023年3月号](#)）が参考になります。このサイトでは、^{げんしゅ}サクラの原種として、ヤマザクラ、エドヒガンの写真が挙げられています。それらをもとに、いろいろな品種が作られたようです。あいにく、エドヒガンの写真は持ちあわせていません。

オオシマザクラはみずき野さくらの杜公園で見られるので写真を載せておきます。

オオシマザクラと他のサクラとの交雑によって生じた品種をサトザ



オオシマザクラ

4月上旬 みずき野さくらの杜公園

クラと総称します。源氏物語とは直接関係ありませんが、みずき野さくらの杜公園で撮ったいくつかのサトザクラの写真も載せておきましょう。



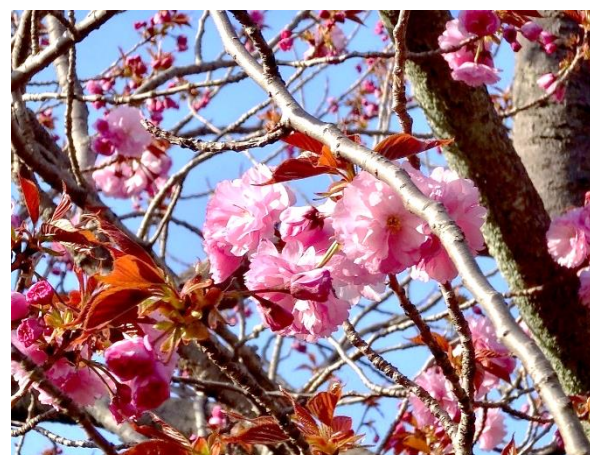
フゲンゾウ(普賢象) (サトザクラ)
4月下旬 みずき野さくらの杜公園



キクザクラ(菊桜) (サトザクラ)
4月下旬 みずき野さくらの杜公園



ショウゲツ(松月) (サトザクラ)
4月下旬 みずき野さくらの杜公園



カンザン(関山) (サトザクラ)
4月中旬 みずき野さくらの杜公園

はなのえん みこ かむだちめ くぎょう いんじ
「花宴」の巻では、親王たち、上達部(公卿のこと)をはじめ、詩文を作る人たちは韻字を
賜り、それを使った詩文を作ります。韻字とは漢詩文で韻をふむために句末に置く字のことで
す(広辞苑)。無論、源氏が作る詩文が抜きん出て優れていることはいうまでもありません。
はなのえん しゆくしょ
「花宴」は夕刻まで続き、人々は宿所に帰り、宵には月が差し出でて明るくなります。源氏は
ふじつば
酔心地で藤壺を窺いますが、戸口も締まっけて入れず、やむなく近くの弘徽殿を覗きます。
こきでん
弘徽殿女御は上の局である清涼殿に行っていたので人もまばらでした。弘徽殿の三の口
おぼろづくよ
が開いて、「朧月夜に似る物ぞなき」と誦しながら三の口に出てきた若い女性を思わず抱き
とめます。この女性は以後「朧月夜君」と呼称されます。おぼろづくよのきみ おぼろづくよのきみ こきでんのようご
朧月夜君は弘徽殿女御の六君
(6番目の姫)で、この君はのちに源氏が須磨に流される原因をつくる源氏物語の中の重要
人物のひとりです。